信毎俳壇

坊城 俊樹 選

日本史は維新を待たず卒業す　（塩尻市）古厩 林生

ものの芽や螺旋階段左巻　（飯山市）田中 琢雄

月光を入れて氷柱の太りゆく　（松本市）新田 順子

灯の入れば我も雛の国の人　（上田市）竹内 創造

裸婦像の白無垢纏ふ暮雪かな　（松本市）伊藤 和夫

籠揺れて春眠揺れる昼下り　（白馬村）碓井 つね

梅一月今宵石牟礼道子の忌　（長野市）白鳥 寛山

アルプスは雪降る度に鋭角に　（伊那市）中村 茂子

黒髪の雨水雛見て髪染める　（下諏訪町）中村 久

嬰児の嗳気を待つや夜半の雪　（千曲市）森川 重美

佳作

大欠伸春はたしかに来てをりぬ　（須坂市）丸山 英子

値下げまで待てば帰りは春寒し　（木島平村）日台 敏夫

選評

一句目、高校あたりの日本史の授業のことだろう。平安や戦国時代を経て江戸時代まで来たあたりでもう卒業することに。私にもそんな思い出がある。二句目、ものの芽はねじれていることも多い。左巻きの螺旋階段を思い出したそのユーモアに感服。三句目、氷柱に沿って月光が流れ落ちるように見えた。その光とともに氷柱がどんどん太っていく。その光景の主観・客観混淆の描写が見事。

今井 聖 選

飼葉桶に馬の抜け歯や冴返る　（箕輪町）向山 政俊

攫はれし姫の逃げ込む雛の段　（佐久市）真山 邦弘

鳶たちが臓物漁る春の山　（茅野市）小平 訓男

経つほどに亡き犬探す雪の庭　（伊那市）竹松 ごう

大蒜の芯の緑や寒明くる　（佐久市）吉岡 徹

ごぼごぼと水路の春や猿の群れ　（須坂市）東島 雄二

炬燵での決心外に出て変り　（伊那市）中村 茂子

コンビニの灯りに安堵と春北斗　（松川村）中野 重行

術後の子肥る天皇誕生日　（佐久市）西田 和彦

大雪や空き家の影の大きかな　（佐久市）三石 俊司

佳作

測量や次の歩幅に犬ふぐり　（須坂市）清水 章

レジ係ゐる列ほのと暖かし　（佐久市）佐藤 勝子

選評

一句目、馬の抜けた歯を描写した俳句を始めて見た。誰も描いたことのない秀抜のカット。二句目、雛壇の女雛を眺めながら想像が膨らむ。ここに居るのは攫われて来た姫だと。どこか危機感が漂う。三句目、春の山中での食物連鎖を描いた出色の一句。暗いがこれが動物たちの現実。四句目、ペットロスなどと言うが愛犬を失った悲しみは時間が経っても癒えることがない。

神野 紗希 選

ひね芋の芽のぞくぞくと立ちにけり　（佐久市）佐藤 勝子

削り屑に微光の春や竹とんぼ　（佐久市）西田 和彦

羚羊の蹄跡より谷雪解　（佐久市）真山 邦弘

乳の香は雪の白さよ障子の陽　（須坂市）富田 孝弘

万歩へと踏み出す一歩春の土　（箕輪町）向山 政俊

雛しまふ雛の瞳の濡れしうち　（塩尻市）古厩 林生

ラディッシュや畑の雪に朱を添へて　（長野市）宮沢 義親

うっすらと雪うっすらと二人言　（塩尻市）神戸 千寛

いぬふぐり気ままに咲いてモネの青　（飯山市）田中 琢雄

海に行き空に行きたき雪解川　（伊那市）中村 茂子

佳作

北に発つ夫のカバンに冬帽子　（坂城町）中村すゞ美

早春やわさび田見つつ水を飲む　（安曇野市）中島 宏子

選評

一句目、収穫して数カ月寝かせておいた「ひね芋」が、植え付けの春を迎え、こぞって芽を吹き始めた。二句目、春の日がさす縁側だろうか、竹を削って玩具を作る。ひね芋に湧く命も、竹とんぼの削り屑に集まる光も、見過ごされやすいからこそ、焦点をあてることで、暮らしに生きる俗の尊さが浮き彫りになる。三句目、羚羊の蹄の跡という極小の点が句の要となり、谷の雪解けを大きく広げた。